

花
の
面
影

小
林
倫
子

◆登場人物

・少年 　・女郎 　・生娘 　・小姑娘 　・乙女 　・少女

柔らかな風と葉擦れの音。

五人の少女たちが、野原で花冠を作つてゐるかのように、もしくはまるで花そのものであるかのように楽し気に談笑している。

誰もいない。小鳥のさえずりが聞こえるくらいである。

びゅう、と風が吹くと少女たちは身をすくめ、皆黙つて

ひゅう、と風が吹くと少女たちは身をすくめ、皆黙つて

何度もそんなことを繰り返しているところに突然一人の制服姿の少年が
ぶつぶつと呟きながら現れる。

少年、少女たちのまわりを呑きながらウロウロと歩き回る。少女たち、まったく我関せずと楽しくおしゃべりを続ける。

少女
バタークリームとラムレーズンを挟んだビスケットほど贅沢で幸せな

バタークリームとラムレーズンを挟んだビスケットほど贅沢で幸せなものはないわ。（にっこりと微笑む）

乙女

娘 そうでも。熱心にレースを編む

そうですとも。
(熱心にレースを編む)

生娘 そんなものばかり食べると虫歯になるんだから。

女郎
あなたはスルメでもかじつてなさい。

生娘
ひどおい。

乙女
あら、スルメきらい？

生娘
だいすき。

五人、コロコロと笑う。少年、少女たちのまわりを呴きながら歩き続ける。

少年のポケットのスマートフォンが振動音を鳴らす。
少年、反応せずひたすら歩き回る。
やがてスマートフォンが切れる。

（生娘に向かって）そのうち大酒呑みになるんじやないの、色氣がないわねえ。

いらないんだもん、そんなもの。

小娘
そうですとも。（熱心にレースを編む）

乙女
この先もずっと清く正しく美しく生きるの、あたしたち。ねー。

生娘
ねー。

小娘

そうですとも。

小娘、熱心に編んでいるレースを少し広げ、編目を確かめる。全ては見えないが、かなり大きいもののようにある。

女郎

ふうん、乙女チック、つまんない。（小娘のレースを見て）それなあに？

小娘

カーテン。お部屋の窓が大きいんです。綺麗でしょう。

乙女

乙女だもん、あなたとは違うの。

女郎

ちょっと聞いた？（少女に）どう思う？

少女

あなたとは違うの。（にっこり微笑む）

女郎

うわあん、どうせあたしは売女よ！

生娘

バイタってなに？

女郎

あんたは知らないいいのよ、スルメちゃん。くすん、ねえ、あたしのこと好き？

生娘

だいすき。

少女

もちろん好きよ。

乙女

大好きよ。

小娘

私も好きですよ。（熱心にレースを編む・巨大）

女郎

うわあん、あたしも好き！

少女

バタークリームとラムレーズンを挟んだビスケットと同じくらい大好きよ。

女郎

ありがと、バタークリームちゃん。

五人、コロコロと笑う。

風がひゅう、と吹き渡る。少女たち身をすくめて風の吹いていく方向を黙つてみつめる。少年、またもや呟きながら少女たちの周りを歩き回る。

少年

風がまたびゅう、と吹き渡る。少女たち身をすくめ風のゆくてをみつめる。

少年、やはり全く反応せず、そのうちにスマートフォンが切れ。なおもブツブツ言いつづけた。

少年

少女たち、異様な様子の少年にやつと関心を向ける。

さつきからなあに、あれ。
(眉をひそめる)

死にたいって言つてるよ。

まだ子供じやないの、女の子にふられでもした？

ぐるぐるウロウロブーブー、まるで蛇か蜂みたい。

あら、じやああたしたちは甘い匂いのするお花ね。

小娘 ステキ！（レースを編みながら・巨大）

乙女 はいはい。

女郎 なんだかこれ見よがしねえ。構つて欲しいのかしら。

乙女 ほつときなさいよ、あんなのに構うと碌なことがないんだから。

少女 ほつとくと本当に死んじやうかもしれないわ。

小娘 ひつ！（レースを編みながら・巨大）

乙女 あら別にいいじゃない。

小娘 ひつ！（レースを編みながら・巨大）

女郎 あんた冷たいわね！

乙女 冷たいもおん。

女郎 ほら、この子すっかりおびえちゃつたじやない。（小娘を抱き寄せる）
おお、よしよし、レースカーテンちゃん、可哀そうに。

小娘 バイタちゃん・・・！

女郎 ああ、ね。

生娘 よし、構おうつと！

乙女 あつ、よしなさいって。

生娘、少年の前に飛び出す。

生娘 こんにちは。

少年、心ここにあらずという風に素通りする。

少年　死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、

生娘　めげずに少年を追いかけ、再び少年の前に飛び出す。

生娘　こんにちは！

少年、生娘を無視して通り過ぎる。

少年　死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、

生娘、少年の前に回り込んで手を大きく打ち鳴らす。

少年、一瞬止まる。

生娘　こんにち・・・！

少年、スタッスタと歩いていく。相変わらず呟きながら。

少年　死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、

生娘　もう。

乙女　ほらごらんなさいな。

生娘 ねー！全然反応しないよこの子。おかしいんじゃないの？

乙女 かもね。

生娘 こんなになつちやうくらい死にたいのかな、若いのに。

乙女 そなんでしょうよ。

女郎 あんた冷たいわあ。

生娘 ちょっとー、冷たいちゃんもやつてみてよ、なんとかなんない？

乙女 あたし冷たいの。だからイヤ。

生娘 ケチ。ケチちゃん。

乙女 ケチなの。

少女 見せて。

少女

少女、少年の顔の前で手をひらひらさせたり指を鳴らしたりする。少年、全く
反應しない。

生娘 ね、ちつともでしよう？

少女 ほんとね。

生娘 目が見えないのかな。

女郎 でもちゃんと普通に歩いてるわよ。

少女 ふうん・・・、自分以外の事が目に入らなくなつちやつてるのね、何故だか。

生娘 どういうこと？

少女 文字通り自分のことしか考えていない。この広い世界にいて、自分の頭の中
・・・いまは死ぬことしか見ない。どれほど美しいものもこの目には
映らない。彼には何も届かない。きっと意味すら今はもう無いんだわ、きっと。

乙女 ああ、嫌だ、ぞつとする。

生娘 目だけじゃなく？耳も？

少女 多分。

生娘 じゃあ鼻・・・えっと匂いや食べ物の味は？

少女 さあ、どうかしら。

生娘 バタークリームとラムレーズンのビスケットないの？食べさせてみようよ。

少女 もう食べちゃったわ。

乙女 勿体ない。この世の楽しさをみんな捨てちやうなんて。

少女 そうね、この野原にみんなでこうしているだけでこんなに素敵なのに。

びゅう、と強い風が吹き、ざざあつと葉擦れの音が響く。
少女たち、また身をすくめ風のゆくてをみつめる。

死にたくなるって男の子にはよくあるのかな、あたし一度もないよ。

生娘 バタークリームちゃんは？

少女 ないわね。

乙女 知らない。どっちにしたってそんなのもう死んでいるのと同じよ。

よかつたじゃない、願いは叶ってるも同然だわ。

生娘 ケチで冷たい。

乙女 彼が自分でそっちに向かっているんでしょう？ 知ったこっちゃないわよ。

生娘 何か訳があるかもしないし。

乙女 あつたとしてももうその意味もなくなつちゃってんのよ。

生娘 冷たいよ。

乙女 赤の他人よ、なんでそんなに気にするの。

生娘 うーん、構つたのに無視されると気になるの！

乙女 気にしなきやいいの！

生娘 だつて気になるんだもん！ 気になる！

生娘、少年の肩を掴んで揺する。少年、全く反応しない。

女郎 あら、それはもしかして恋、でも始まっちゃつたんじゃない？

四人 恋？

生娘 恋、だなんて。今会つたばかりよ。

少女、乙女、小娘、首を揃えてうんうんと頷く。

女郎 よくある話じやないの。袖振り合うも多生の縁、目が合つたり肩がぶつかつたりでも始まる、それが恋よ。

小娘 ひつ。（真剣に怯える。）

女郎 おおよしよし、怯えなくていいのよ、誰でも通る道なんだから。

少女 恋ねえ。

乙女 趣味の悪い。不潔だわ、まるで流行り病。

生娘 ええ、あたし恋なの？やだなあ。

少女 お赤飯炊かないといけないのかしら。

生娘 やだなあ。

女郎 はしかみたいなもんだって昔からよく言うでしょ、あんたたちのケツの青さには辟易するわね。

小娘 ケツ！？

女郎 そ、う、よ、も、う、真、つ、青。

小娘 ひっ！

女郎 おおよしよし。（小娘を抱き寄せ、頭をなでる）

乙女 いちいちはしたないわね、お下品！

女郎 恋と下品ならこちとらそれが商売。俄然やる気が出てきたわ。

少女 何するの？

女郎 決まってるじゃない、恋に落ちたらまずはお化粧！

女郎、大量の化粧道具を持ってきて、がつさりと広げる。

女郎 座つて座つて。

生娘 ええ。

女郎 いいからいいから。

生娘 待つてよ、あたしほんとに恋なの？

女郎 恋恋。いいからいいから。

女郎、生娘を座らせる。

女郎 目を閉じて。

女郎、生娘に化粧を施す。生娘の瞼や唇が女郎の手で彩られる。

少女 へえ、随分感じが変わるのね。

生娘 そうなの？（目を閉じたまま）

乙女 けばけばしいわ、やつぱり下品よ。

女郎 でも楽しいでしょう。

少女 うふふ、楽しい。そうだ、私可愛いお洋服探して来る。
（にっこり微笑む）

生娘 え。

女郎 動かないの。（生娘に）頼んだわよ！（少女に）

少女 まかせて！

少女走り去る。

小娘 あの、恋って下品なんですか？バイタちゃん。

女郎 バイタ・・・。

乙女 最初は自分で言つたのよ。

小娘 バイタちゃん。

女郎 （ため息をつく）ええと、なんだっけ？

小娘 恋。

女郎 ああ、始まりはどんなに綺麗でもそうね、流れ着くところはね、とても人様にお見せできるシロモノじやないかも。

小娘 ひいいい。

生娘 ええええ～。

女郎 動かない。だあいじょうぶ、惚れた相手ならそれがまたたまんないんだから。

乙女 不潔よ。

生娘 惚れた相手って、あたしその子に惚れてるかなあ。

女郎 惚れてる惚れてる、心なしか色氣も出て來た。

生娘 やっぱやだ！あたし恋やめる！なんかやだ、色氣なんか出したくない！

少女 これなんかどう？

少女、とても可愛いワンピースを持ってくる。生娘、あれよあれよという間に女郎と少女によつて着せ替えられ、髪型を整えられ、アクセサリーで飾られる。

女郎 はい出来た。可愛い。

生娘、可愛い。そこはかとなく色氣も出ている。少女と乙女と小娘感心する。

生娘 可愛いの？

少女・小娘 可愛い可愛い。

小娘 お姫様みたいよ。

乙女 まあ悪くはないんじやないの。

女郎 はい、殿方に見て頂きましょうね。

女郎、着飾つた生娘を少年の前に立たせる。

間

少年 死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、

少女 そうだったわ。

生娘 やっぱやめる、向いてない。

女郎 待つて。

生娘 傷ついた。

少女 そうよねえ。

乙女 予定通りあたしたちと清く正しくいきてゆきましょう。

女郎 あたしに任せて。まずは関心をこっちに向けなきやね、可愛いスルメちゃんのためなら一肌脱いじやう。ええと、これならどう？

女郎、少年の顔のそばで自分の襟元を扇子でおぐ。

少年、ピタリと呴くのをやめ、香りを探るような仕草をする。

小娘 あっ！

少女 やつたわ。

女郎 これは？

女郎、裾をからげて片方の脚を出しゆらりと宙に動かす。

少年の目が女郎の脚に釘付けになる。

少年、宙をおよぐ女郎の脚を一心に見つめ続ける。

少女 涙い。

乙女 不潔！でも流石！プロね！

女郎 若い男の扱いは本能に訴えるに限るわ。

生娘 複雑・・・。

女郎 こんなのはほとんど反射なんだから気にしない。でも、まだちゃんと見えている訳じゃなさそう。

少年、闇の中でなにかを探すように手探りでゆっくりと動きはじめた。
もう呟いてはおらず、表情は少しづつ穏やかになっている。

小娘 でもさつきから「死にたい」って言うのやめましたよ。何か探してるみたい。

女郎 あたしの脚ならこっちよ。

乙女 違うみたい。

女郎 失礼ねえ。

少女 ほんとうね、上手くいけば戻ってくるかも

生娘 どこに？

少女 この世界に。

びゅう、と風が吹き、ざざあっと葉擦れの音とともに少年のスマートフォンが
振動音を鳴らす。少年、電話に出る。

少年 もしもし。

突然電車の警笛がパーンと鳴り、辺りが暗くなる。と同時に電車の轟音、踏切の光と
信号音、駅のアナウンス、ホームの大勢の足音、走り去る車のライトとクラクション、
ありとあらゆる雜踏の音や光が洪水のようにおしよせる。
風の渡る一面の野原は一瞬にして気配すら消し飛ぶ。

少年 おう、悪い、電話鳴つてんのわかんなかったわ。え、そんな何回も

かけた？いや、悪かつたつて。

少女たち、電話で友人と話す少年を遠巻きに眺める。
とても眩しそうに。

少年

え？ うん。なに。俺、変だつた？ そう？ そんなことないって。
・・・ うん、・・・ うん、・・・ そう？ ・・・ うん・・・
そ う か な ・・・ う ン、・・・ あ あ、う ン・・・ ま あ、そ う か も な
ん？ うん、へーきへーき、うん、も う だ い じ ょ う ぶ、全 然 よ。
ホ ン ト ホ ン ト。なん か 腹 へ つ て き た わ、ラーメン 食 つ て 帰 ろ か な。
お う、悪 か つ た な、なん か 心 配 か け て。あ が が と、じ ゃ な。

少年、電話を切り、軽やかな足取りで行ってしまう。

残された少女たちのまわりを静寂が包む。

ざざあっと野原をわたる風の音のむこうにほんのかすかに踏切の信号音。

生娘

行つちやつた。

乙女

ええ、そ う ね。

少 女

そ う だ つ た わ。

乙女

すっかりこの世界を生きて楽しんでいる気持ちになつてた。

女郎

あんたたちと遊んでいるのがあんまりにも楽しいもんだから。

生娘

忘れてたね。

少 女

いつからこの野原でこうして笑っていたのか。

乙女

いつからこの野原で風に揺られていたのか。

小娘

いつからこうしてレースを編んでいたのか、ほら、もうこんなに。

小娘、編んでいたレースを広げる。それは野原を覆いつくすほどに大きい。
少女たちはそれぞれレースを手にして頭に被つたりくるまつたりする。

生娘
あの人はあたしを覚えていてくれるかしら。

女郎
あの人はあたしを忘れてくれるかしら。

乙女
私達、もう互いの名前すら定かではないけれど。

野原を風が吹き渡る。

少女
少女、身をくるんでいたレースを脱いで立ち上がり、につこり微笑む。

少女
さあ、バタークリームとラムレーズンを挟んだビスケットでお茶に
しましよう。

終